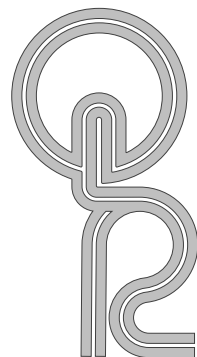


第四紀通信

Vol. 5 No. 6, 1998



モン・ドール火山山頂近くでのジュヴィニエ博士による説明。背景はセザリエ火山群
(INQUA COT-UISPP 31 シンポジウム ポスト巡検：本文参照。撮影 - 早田 勉)

Vol. 5 No. 6

November 30, 1998

第四紀学会講演会 / 1999 年大会	2	第 6 回国際古海洋学会議報告	7
第 6 回日本第四紀学会講習会報告	3	脳と意識に関する国際会議	8
INQUA 第 15 回大会について	3	元会長貝塚爽平先生追悼	9
上高森遺跡と周辺地域のテフラ	4	第四紀研究連絡委員会議事録	10
INQUA COT-UISPP 31 会議報告	5	会員消息	11
IGCP-367 コリント会議報告	6	おしらせ	15

日本第四紀学会講演会

下記のように日本第四紀学会講演会を開催いたします。多数の会員の皆様に参加されますようお願いいたします。

記

日 時： 1999年1月30日(土) 13時30分～15時30分

会 場： 茗溪会館
地下鉄丸の内線茗荷谷駅前

講 師： 木村英明 (札幌大学文化学部比較文化学科)

テ - マ： シベリアの旧石器文化(仮題)

参加無料。事前登録等は必要ありません。直接会場においで下さい。

日本第四紀学会 1999年大会 第1報

1999(平成11)年8月23日～27日

日本第四紀学会研究発表大会及びシンポジウムと巡検

実行委員会 委員長：岡田篤正 副委員長：増田富士雄

委 員：竹村恵二・堤 浩之・植村善博・水野清秀 ほか

日時 8月23日(月) 一般研究発表

8月24日(火) 一般研究発表 懇親会

8月25日(水) シンポジウム

8月26日(木)・27日(金) 巡検

会場： 京都大学理学部1号館5階大講義室と周辺の講義室・会議室

シンポジウム：

仮題 - 『活構造と都市地盤・災害 - 阪神大震災から5年目の発信 - 』

巡検案

8月26日(木) 京都大学出発

候補ルート： 琵琶湖西岸 - 湖北 - 敦賀 - 三方五湖 - 花折断層
- 京都盆地東縁 - 有馬 - 高槻構造線

8月27日(金) 新大阪駅解散 午後4時から5時を予定

案内者(予定) 寒川 旭・植村善博・小松原 琢・吉岡敏和 ほか
世話人：岡田篤正・竹村恵二・堤 浩之・増田富士雄

会費の支払いはお済みですか？

12月20日前後に今年最後の学会費の請求書が届けられます。これを受け取られた方で、まだ支払いを済まされていない方は至急支払いをお願いいたします。一年間会費未納の方は次号から『第四紀研究』と『第四紀通信』の発送が停止されます。未払いを繰り返された場合滞納額全部を納付されるまで会誌は停止されますし、一度に支払う額も大きくなります。また、長期にわたって滞納された場合は除籍等の対象ともなります。最新の情報を価値のあるうちに受け取られるためにも、是非滞りない納付をお願いします。

第6回日本第四紀学会講習会（報告）

加速器質量分析（accelerator mass spectrometry: AMS）法で測定された¹⁴C年代は、近年さまざまな分野で報告されており、その利用は第四紀研究においてもますます重要になってきました。日本国内のAMS¹⁴C年代測定では、これまで名古屋大学のタンデトロンAMSがルーティンに稼働している唯一の装置でしたが、最近では、国立環境研究所などの3施設が新たにAMS¹⁴C年代測定を開始しております。国内の¹⁴C年代ユーザーが、これらの装置を有効に利用するには、自分の試料を自身で調製することが近道です。また、自分が利用する¹⁴C年代の意味や適用限界を知るには、試料調製及び年代測定のプロセスを理解しておくことが大切です。このため、AMS法による¹⁴C測定のための試料調製法の実習が、平成10年10月31日、11月1日の2日間、第四紀学会主催で、名古屋大学年代測定資料研究センターにて実施されました。

AMS法による¹⁴C年代測定法の概要と、年代測定に用いられる典型的な試料である木片及び¹⁴C年代測定の標準体であるNISTシュウ酸の前処理、燃焼によるCO₂生成、液体窒素などの冷媒を用いたCO₂の精製、水素還元によるCO₂のグラファイト化、そしてターゲット作成まで、受講者による実習や講師によるデモンストレーションが行なわれました。化学処理、秤量、ガラス細工などと盛りだくさんの課題を、初日の午後と2日目の午前、午後は3時までの短時間でこなしました。また、最後には操作手順の総括と質疑応答が活発に行われました。今回の講習により、AMS法による¹⁴C年代測定の大まかな流れを掴んでいただけたものと期待します。

今回の受講者11名のうち、2名は液体シンチレーション法による¹⁴C年代測定の経験がありました。また、4～5名は、さっそく実試料の処理を実施したいとの希望を持っています。このような講習会のニーズが高まっていることの現れだと思われます。講師は、歴史民俗博物館から今村峯雄、坂本 稔氏、名古屋大学から小田寛貴、池田晃子、高橋 浩、そして私、中村俊夫、また、実行委員長は辻 誠一郎行事幹事でした。なお、第7回講習会は平成11年1月30～31日に歴史民俗博物館にて実施される予定です。ガラス製の真空ラインからなる試料調製装置を用いるため、受講者数は限られますがふるってご参加ください。受講申込みの締め切りは12月25日です（詳細は、第四紀通信、vol.5, no. 5を参照してください）。

（名古屋大学年代測定資料研究センター 中村俊夫）

国際第四紀研究連合 (INQUA) 第15回大会

発表申し込み等締切 - 1999年1月31日

1999年8月3日～11日にダーバンで開催される国際第四紀研究連合の重要な締切日が近づいています。1999年1月31日には以下の事項が締め切られます。講演・参加を予定されている方はセカンドサーキュラーおよび第四紀通信 vol. 4, no. 6, あるいは同大会ホームページ(<http://INQUA.geoscience.org.za/>)を参照して以下の手続きをとって下さい。

- (1) 登録料(基準額：一般 - US\$350, 学生 - US\$200)全額払い込み
クレジットカードを利用すれば Fax またはオンライン*で支払いが可能です。
登録料全額の払い込みがアブストラクト受理の要件となっています。
- (2) アブストラクト提出
フロッピーディスクまたは電子メール、およびいずれの場合もそのプリントアウトが1999年1月30日までに事務局長に届いていなければなりません。
- (3) 巡検参加費の20% [参加を取り消しても返却されません。]
- (4) 宿泊を申し込む場合は、その代金2日分。

*1998年12月1日現在暗号で保護された申し込みページではありません。

上高森遺跡と周辺地域のテフラ - 巡検報告 -

塚本すみ子

東京都立大学大学院理学研究科地理学教室

11月7日・8日に行われた上高森遺跡と周辺地域のテフラを見学する巡検に参加した。上高森遺跡と高森遺跡は、宮城県北部の築館町にあり、中期更新世の築館丘陵の上に位置している。築館丘陵では、丘陵を構成する高森礫層の上部に西部の鬼首火山や鳴子火山などを起源とする60層もの降下火山灰や火砕流堆積物が厚く堆積している。この地域の遺跡の時代を推定するために、これまでに周辺に分布するテフラの詳細な層序が明らかにされ、多くのテフラの放射年代測定が行われた結果、最古の石器の層準は約60万年前まで遡ると考えられている。

11月7日午後1時半に古川駅に集合し、用意していただいたマイクロバスに乗る。国道4号線を北上し、しばらくの間北上川支流の沖積低地を走るが、やがて築館丘陵に入る。まもなく上高森遺跡に到着。上高森遺跡では発掘作業の進行中で、大勢の研究者や学生さんたちが作業をしていた。上高森遺跡発掘調査団の鎌田俊昭さんと案内者の早田勉さんから説明を受ける。この上高森遺跡では、石器と剥片と石核が同時に出土していることが画期的だそうである。すると石器の接合の名人である横山裕さんが登場し、たちまちばらばらのピースがつなぎ合わされ、もとの石の塊が復元された。上高森遺跡で出土した石器はいずれも倉ノ沢第1テフラと呼ばれる火山灰層の下位から見つかっているが、この倉ノ沢第1テフラ(Ks-1)は築館丘陵の上に分布するテフラ群の中では最も古いと考えられているテフラである。Ks-1やその上位の高森第1テフラ(Tm-1)の降下した時代についてはSoda and Sugiyama(1998)による植物珪酸体分析の結果、ネザサ率が高く、非常に温暖であったとされている。これらのテフラの降下時期は、古地磁気による編年や熱ルミネッセンス法によるテフラの年代測定結果から、酸素同位体ステージ(MIS)15に対比される可能性が高いそうである。

次に発掘現場脇の露頭で倉ノ沢・高森テフラ群を観察する。この露頭ではKs-1からKs-4、Tm-1からTm-18が同時に観測できた。これだけ数多く、複雑に分布し、ガラスはもとより斑晶鉱物も一見したところほとんど残っていないテフラの層序を編むのは筆者などには想像もできないプロの技である。

続いて北東約700mの高森遺跡に移動した。ここは駐車場も整備され、公園のようになっていたが、看板がなければもはや遺跡とはわからない。石器の写真をもとに素材や製法について山田晃弘

さんから説明を受け、近くの露頭でTm-1からTm-4を確認。石器を探すときにはテフラの直下をねらうと聞き、密かに期待しながら露頭を掻いてみる。不思議なもので、最初に石器を見つけることのできる人というのは、かなり限られているのだそうだ。

テフラの見学は徐々に上位のものが見学できる露頭へと、順番を考えてくださっている。1日目最後の露頭は、一迫町古屋敷。2つの遺跡のわずか数百mの位置にあるが、間に谷をはさみ高森礫層を切って堆積する古屋敷礫層と縮沢(しゅくのさわ)火砕流堆積物、古屋敷テフラ群が観察できる。古屋敷第7テフラ(Fy-7)の下の土壌は暗赤色で、八木浩司さんが一目見て温暖期、と指摘する。案内書を見ると確かにMIS9に対比されていた。

この日の宿泊は川渡温泉の玉造荘温泉に入り、夕食の後、夜のセミナーが開かれた。周辺のテフラの放射年代測定について(長友恒人さん・豊田新さん)、中期更新世の広域テフラについて(鈴木毅彦さん)、日本の前・中期の石器文化と年代について(柳田俊雄さん・早田勉さん)のお話があった。今回の巡検では参加者16名中の約半数が年代測定関係者ということもあり、色々な手法の専門家の間で白熱した討論が行われ、セミナーは4時間近く続いた。

2日目はまず、前日の鈴木さんのお話に関連して、広域テフラの可能性があると考えられている火山灰を見に行くことになった。高森・上高森遺跡に関連するテフラの層序を確立する上での問題点の一つが、広域テフラと対比可能なものが見つからないことであった。しかし最近有力な候補として浮上したのが、川渡温泉に程近い鷗目(もづめ)集落の南西約2kmの露頭で見られる“笠森5もどき”であった。だが、火山ガラスの組成からは、上総層群中の笠森第5テフラとはどうやら違うということになったらしい。九州起源にしてはたしかに粗粒かなという印象であった。

続いて古川市倉ノ沢の露頭へ行く。ここでは築館丘陵の基盤となっている湯浜凝灰岩、倉ノ沢礫層(高森礫層と同時期)、倉ノ沢・高森テフラ群が観察できる。本露頭では広岡(1996)により、詳細な古地磁気層序が明らかにされており、Ks-1の層準はBig Lost、Tm-1はEmperorの各イベントに対比されているようだ。さらに3箇所の露頭を周り、築館丘陵に分布する大規模火砕流堆積物のうち、下山里火砕流堆積物と鬼首池月火砕流堆積物を見学して巡検は終了した。1泊2日といっても丸1日の限られた時間の中で大変盛りだくさんの内容を見学でき、好天にも恵まれ、大満足の巡検であった。

企画された小野昭先生、早田勉さんをはじめ案内者の方々、上高森遺跡発掘調査団の方々にこの場を借りて御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

INQUA COT-UISPP 31
Inter-Congress Symposium
Téphrochronologie et coexistence
Homme-Volcans (Tephrochronology
and coexistence Human-Volcanoes)

テフロクロノロジーと人間・火山の共生
シンポジウム 参加報告

早田 勉 (古環境研究所)

「こんにちは。私の名前はマリーと申します。」思いがけない日本語の挨拶で今回の会議は始まった。8月23日夕方、フランスのオーヴェルニュ地方ルピュイ駅前でのことである。サンテティエンヌ駅からのローカル列車でルピュイ駅についた日本からの参加者に声をかけてきたのは、オーガナイザーのJ.P.Raynal博士(フランス)の御令嬢である。日本語の教師を志す彼女は、フランス語が頻繁に飛び交う期間中日本からの参加者の心強い存在となった。

人間と火山の共生を主題としたこの会議は、INQUA COT (Tephrochronology Commission) と UNESCO の Commission 31 (Union Internationale des Sciences Prehistoriques et Protohistoriques) の共催で行われた。構成は、講演会およびポスターセッション(8月24~28日、ルピュイの隣町ブリーブ・シャレンザックの公会堂)とポスト巡検(8月29~31日、モンドール火山やシェヌデピュイ火山群)からなり、欧米諸国のほか、カナダ、ニュージーランド、トルコ、日本(町田洋・福岡孝昭・奥野 充・筆者の本学会会員4名)の14か国から約45名の研究者が参加した。

講演会では、最初にオーヴェルニュ地方の火山についての解説が行われ、その後サブ・テーマごとに発表が行われた。サブ・テーマは、1) Tephrostratigraphy and eruptive dynamics, 2) Tephrochronology and Palynology, environmental impacts, 3) Volcanism and Archaeology, 4) Global impacts of Volcanism, 5) Dating the Volcanismであった。ポスターセッションを含め全体で57講演が行われたが、その中では Volcanism and Archaeology について18講演と最もも

多くの講演が行われた。

講演会では、とくに人類との関係が主題にうたわれていたにもかかわらず、地質学や地理学の分野からの発表が圧倒的で、人類学や考古学などの分野からの発表が少なかった。また、火山と人類という大きなテーマ設定が行われたために内容は多岐にわたり、刺激的な講演もあったものの、中には人類に関係する部分にもの足りなさが感じられる講演も認められた。さらに今回はロシアカムチャッカからの2件など、従来情報の少なかった地域からの講演もあったが、南北アメリカ、東南アジア、アフリカなどでフィールドワークを行っている研究者からもより多くの話題提供があると良かったように思う。

講演会の期間中には、東グレイ火山群と西グレイ火山群へ2度の半日巡検が行われた。鮮新世から更新世前期にかけての多量の哺乳類化石が発掘されたシラクの古生物学博物館では、J.P.Raynal博士より同地点で出土した石器を含め、フランスの約60万年前より古いとされている石器は人工物でなく、テフラの噴出堆積に伴って形成された「Tephrofacts」とする見解が述べられ、研究者間で議論が白熱した。

ポスト巡検も好天に恵まれ、オーヴェルニュの伸びやかな火山群の景観を十分満喫することができた。モンドール火山周辺の露頭では、フランス最大規模の火砕流堆積物や、岩屑なだれ堆積物の見事な断面も観察できた。シェヌデピュイ火山群は、ミネラルウォーター「ヴォルヴィック」のラベルやコマーシャルですっかり日本でも有名になっている。巡検の解説の中では、溶岩に関するK-Ar年代測定値や化学分析値の豊富さが目をひいた。ただ個々のテフラ層の記載に関しては、まだ研究の余地が残されているように感じた。

今回の会議に関しては、事前に提供された情報が極端に少なく、また異例のペース配分で行事が運営されたため、多くの参加者には少々悩み多い旅となった。その反面、会期を通して提供された豪華なフランス料理やおいしいワイン、何よりもJ.P.Raynal博士と御家族さらに彼の仲間たちによる密度濃い心温まるもてなしには感銘すら覚えた。我々の運営のしかたとの違いには、国民性の違いが反映されているように思えた会議であった。

Rapid coastal changes in the late Quaternary 会議報告

太田陽子（専修大学文学部）

1998年9月11～13日に、ギリシャのコリントにおいてIGCP-367, INQUAの海岸線およびネオテクトニクス研究委員会の共催による Rapid coastal changes in the late Quaternary に関する国際会議が開催された。会議のオーガナイザーはギリシャの S. Stiros とフランスの P. A. Pirazzoli。おもにギリシア, エーゲ海地域に関する八つの招待講演と, 49のポスター内容の紹介に関する短い口頭発表があった。ポスターは地域順に配列され, 3日間の十分な時間を取って展示され, 意見の交換に有効であった。太田は11日の1～27のポスター内容の紹介の座長を務めた。13日には, 共催機関のビジネスミーティングが行われた。

IGCP-367は今年で終了し, 次の計画として提案されたオーストラリアの Murray-Wallace による新しいプロジェクト案に関する討議が行われた。INQUAの二つの研究委員会では, 来年のINQUA大会におけるワークショップやポスターセッションに関する討議が行われた。INQUAの執行部の方針に基づいて, この両委員会に関する内容は口頭発表としては行われませんが, ポスターセッションは実施される。発表希望者は, INQUAの会議委員会だけでなく, 両研究委員会の委員長にも発表内容を通知する必要がある(氏名などは第四紀研究に掲載の Quaternary Perspective を参照されたい)。

今回の会議にはおもにヨーロッパからの参加者が多かったが, 北アメリカ, メキシコ, オセアニア, アジアなどを含め計21国から約90名の参加者があり, 盛会であった。日本からの参加者は海津, 上原, 太田の3名。

14～16日まではコリント海岸地域の地震性沈降や隆起の跡を示す離水ノッチ, 考古遺跡の沈水, 1995年の地震断層を含む断層運動の痕跡, 高い所まで発達する海成段丘とその編年, 正断層による分化, など多くの事柄を見学できた。離水ノッチの地形は確かに見事であったが, それからわかる最近の変動が第四紀, 少なくともその後期の変動様式とどう関係するか, 正断層の活動と海岸の垂直変位との関係などに関してはより深い考察が欲しいと強く感じた。また, 更新世の段丘の編年に関してはまだ問題がありそうである。ステージ5eの段丘の認定には, *Stronbus bubonius* の存在と, 限られた数のサンゴのウラン系列年代が使われている。しかし, 上記の化石が出現し始める時期が本当に5eなのか, それとももっと早く7であってもよいのかなど, いくつかの異論も出され, 問題を残している。私にとっては, 時代を異にする段丘群が連続的に発達する厚い前置層をきって発達しており, パプアニューギニアのヒュオン半島の隆起地域に見られた隆起三角州とそこに発達するサンゴ礁段丘の状態とよく似ているのが印象に残った。正断層による断層崖が海岸部に発達していて, その一部は海食崖ともなっており, いわゆる複合崖をなすことも印象的である。崖の上端や下端にも家が密集しているが, 建物建築のための規制はまったくない。たくさんの考古遺跡の沈水は, ギリシアならではの景観を呈するが, この沈水の累積性などについても検討の欲しいところであった。なお, 17日から19日まではエーゲ海の Samos 島の巡検が行われたが, 日本からの参加者はなかった。

第6回国際古海洋学会議（ICP6:リスボン）の報告

大場忠道（北海道大学大学院地球環境科学研究科）

古海洋学は比較的歴史の浅い学問分野であるが、将来の地球気候変化に対する不安もあって、Nature, Scienceをはじめ専門の国際誌PaleoceanographyやPlaeo-3などを通じて活発な研究報告がなされている。しかし、関連する学会は多いもののあまりにも学際的であり、国際的にも国内レベルでも母胎となる学会組織は存在していない。このため、ボランティアが主催する形で3年ごとの持ち回りで国際古海洋学会議（International Conference on Paleocyanography）を開いてきた。これまでの開催地はスイス・チューリッヒ（1回目）、米国ウッズホール（2回目）、英国ケンブリッジ（3回目）、ドイツ・キール（4回目）、カナダ・ハリファックス（5回目）であった。

今年はバスコダ・ガマのインド航路発見500周年にあたるこのことで国連が定めた国際海洋年とされており、ポルトガルのリスボンで国際海洋博覧会(EXPO'98)が開かれている。ポルトガル国内ではこの機会に海に関する国際会議をという強い働きかけがあったようで、今年の8月24日から28日までの5日間リスボンの国際会議場で第6回国際古海洋学会議(ICP6)が開かれた。

この会議の開催地については、一つ前の会議を準備した科学委員会で次回開催地を決定することになっているが、ハリファックスでICP6のリスボン開催が決まった直後から、2001年のICP7を日本で開催するようとの要請が日本人出席者に多く寄せられた。この間の事情を鑑みて、1996年1月に東大海洋研究所で開催した古海洋学シンポジウムにおいてICP7の日本招致を決定し、開催地としては古海洋学関連の研究者が最も多い札幌を承認した。この決定を受けて北大の岡田尚武が当面の窓口となり、1996年1月末にICP6のコンピナーにICP7の札幌招致を申し入れたという事情があった。

このようないきさつもあり、今回のICP6には日本から37名の研究者と大学院生が参加した。さらに在米中の日本人大学院生の参加もあった。会議の事前準備や会期中の運営に多少

の問題点もあったが、科学面では大変実りの多い会議であったというのが私の感想である。

以下にICP6の報告とICP7の準備状況を報告する。

(1) 今回の会議には34カ国から約650人が参加登録し、実際の参加者は600人を越えた。ポスター発表の要旨提出は460であったが、当日の欠席が46あった。ICPへの参加者は毎回増えているようで、今回の参加登録者数は前回よりも100名ほど増えている。

(2) 午前中は招待講演を行い、午後はポスター発表に当てるというこれまでの基本的なスタイルを今回も踏襲したが、新たな試みとして、パネルディスカッションとテーマ毎に分類したポスター発表を一人の演者が1時間もかけて解説するなどの新たな試みもあった。結果的にパネルディスカッションは好評だったがポスターの一括解説は不評であったといえる。

(3) 今回のテーマは、1) 極 - 赤道および南北半球間でのリンケージ、2) 海洋は急激な気候変化の原因か？または、それに反応してきた方なのか？3) 主要な古海洋学的変化に対応した生物界の反応、4) 過去の温暖気候、5) 海洋環境変遷史の新たな研究手段、であった。

古海洋学の世界では第四紀後期の高精度古環境解析を目指すグループと先第四紀の古海洋学を取り扱うグループに分かれつつあるようで、前者はピストンコアやアイスコアを扱うし、後者はボーリングコアや陸上の露頭試料を扱う。前者については年代精度がどんどん高まっており、最近では100年単位での古環境解析が普通で、近いうちに10年単位での解析結果が珍しくなくなるという現状を実感した。

(4) 計25あった招待講演の演者は最近顕著な研究成果を公表した若手研究者と著名な研究者を適度に混ぜて選ばれていたが、最新の成果披露と今後の研究分野の動向が読みとれて、極めて有意義な講演ばかりであった。

日本からは、北大地球環境科学研究科の王律江助教授が招待され、過去4万年間に渡る東アジアモンスーンの変化史をドイツの研究者と共同で詳細に研究した成果を発表した。招待講演

についてはプロシーディングが出版されるので、関連分野の研究者にとって貴重なリファレンスとなるであろう。

(5) ポスター発表でも、今後論文として公表されると高い評価を受けることが確実な最新の研究成果が多数報告されており、この会議が世界の古海洋学研究者にとって最高の発表の場となっていることが明白であった。日本からも大学院生の研究結果が多く発表され、そのいくつかは関係する分野の研究者から高い評価を受けていたのは喜ばしい限りであったが、平均すると欧米の最先端研究所に質と量の両面で後れをとっているように感じた。

(6) ICP6の科学委員会において2001年の第7回会議(ICP7)を札幌で開催することが正式に決定され、岡田尚武が日本の研究者を代表して開催時期や開催地の簡単な紹介と札幌開催の決

定を歓迎するスピーチを行った。

(7) ICP7の札幌開催決定を受けて、9月10日に北大関係者で実行委員会を発足させ、開催期間を2001年10月1日(月)から5日(金)までと決めた。共同コンベンナーとしては北大の小泉 格、岡田尚武、大場忠道がつとめることになった。会場はかなり絞り込まれているがまだ確定していない。いずれにしても札幌都心部となりホテルから歩いてゆける距離である。ICP6のように朝食をとるのもそこそこに連絡バスに駆けつける、ということにはならない見込みである。

(8) これからは日本国内の研究者からなる組織委員会と、ICP7の科学テーマや招待講演者を決定する国際レベルでの科学委員会を発足させて行くことになる。関係する第四紀学会会員の皆さんにもご協力をお願いしたい。

Toward a Science of Consciousness - Fundamental Approaches - Tokyo '99 (脳と意識に関する Tokyo '99 国際会議)

主催：Tokyo '99 組織委員会，国連大学高等研究所，アリゾナ大学意識科学センター
ラッドフォード大学脳情報科学研究センター，スコヴデ大学意識科学センター
ノートルダム清心女子大学情報理学研究所

日時：1999年5月25日(火)～28日(金) 10:00～17:00

場所：国連大学本部(東京都渋谷区神宮前5丁目)

内容：脳組織の如何なる機能並びに素過程から意識が生じるか，認知科学，哲学，情報科学，物理学，生命科学などの観点による最新の研究成果をまとめる。

特別講演と一般講演ならびにポスター発表の予定は次のとおり。

25日 哲学・倫理学からのアプローチ

26日 心理学・認知科学からのアプローチ

27日 物理学・情報科学からのアプローチ

28日 生物学・生命科学からのアプローチ

講演予定者：

武田 暁(東北学院大)，佐藤文隆(京大)，松本 元(理研)，土屋 俊(千葉大)，
菅原直行(京大)，治部眞里(ノートルダム清心女子大)，B. Baars(Wright研究所)，
D. Chalmers(California大Santa Cruz校)，S. Greenfield(Oxford大)，G. Globus
(California大Irvine校)，S. Hameroff(Arizona大)，A. Hobson(Harvard大)
P. Hut(Phnceton高等研究所)，M. Lockwood(Oxford大)，K. Phbram(Radford大)
P. Pyllkanen(Skovde大)，W. Seager(Toronto大)，J. Tuszynski(Alberta大)，
G. Vitiello(Salerno大)，P. Werbos(National Science Foundation)他

定員：300名(先着順)

参加費 25,000円(1999年2月2日までの早期申込の場合)

30,000円(1999年2月3日以降の申込の場合)

10,000円(学生・院生)

連絡先：700-8516岡山市伊福町2-16-9ノートルダム清心女子大学情報理学研究所内

Tokyo '99組織委員会事務局 電話086-255-5636 Fax086-255-5090

電子メールtokyo99@zoushoku.narc.affrc.go.jp

ホームページhttp://www.ias.unu.edu/activities/tokyo99.htm

元会長貝塚爽平先生のご逝去を悼む

日本第四紀学会元会長の貝塚爽平先生は、1998年11月13日（金）に都内の病院にて大腸癌のためご逝去されました。享年72歳でした。葬儀・告別式は11月16日（月）に西浅草の徳本寺にて白尾元理導師のもとでしめやかに執り行われました。貝塚先生は1926年10月18日に三重県桑名町にお生まれになり、1945年3月に第八高校学校理科乙類を卒業、1948年3月に東京大学理学部地理学科を卒業、1950年3月に東京大学大学院特別研究生前期を修了ののち、1950年3月に東京都立大学助手になられ、1990年3月に定年退職される迄、東京都立大学理学部地理学教室で、研究と教育に専念されました。

先生は、関東平野の地形発達史の研究をはじめとして、日本の変動地形の研究、南アメリカアンデス山脈の第四紀地殻変動の研究、アイスランドの火山地形と変動地形の研究、中国黄土高原の地形発達と活断層の研究など、日本と世界各地の地形を総合的に研究されてきました。この間、1973年にニュージーランドで開催された国際第四紀学会、1982年にソ連邦で開催された国際第四紀学会、1985年に英国で開催された国際地形学会議、1989年にドイツ連邦で開催された国際地形学会議など、多くの第四紀学、地形学の国際会議に出席され、その研究成果は国際的にも高く評価されておりました。

先生は1982年から1986年まで日本学術会議第四紀研究連絡委員会委員長を努められ、1991年から1993年まで日本第四紀学会会長を歴任され、第四紀学と日本第四紀学会の発展に尽力されました。1987年に刊行された日本第四紀学会編の「日本第四紀地図」や1991年に刊行された活断層研究会編の「新編日本の活断層」の編集に際しては、代表編者として多数の研究者を取りまとめ、指導的な役割を果たされました。

先生は地形学や第四紀学に関する多数の論文や総説を書かれてきましたが、それらはご



著書の「東京の自然史」（1964年）、「日本の地形」（1977年）とともに、ご逝去の直前に完成した「発達史地形学」（1998年）にまとめられるとともに、「写真と図でみる地形学」（1985年）、「東京湾の地形・地質と水」（1993年）、「世界の地形」（1997年）などの編著として刊行され、多くの人々に読まれています。

先生はいつも笑顔を絶やさず、万人が認める粘り強さで仕事を推し進め、野外にあってはあらゆることに強い興味を示され、高いところに昇るのが大好きでした。また先生は多くのダイアグラムや図表を工夫されて描き、地形面と層序をまとめた日本全国の更新世後期と完新世の編年表（1987年）や大地の自然史ダイアグラム - 地学現象の時間・空間スケール（1989年）などは先生の得意とするものでした。また晩年には水彩のスケッチを描かれ、周囲の人々にスケッチの解説をするのを楽しまれていました。

このように、貝塚先生は第二次大戦後の地形学と第四紀学の発展の先陣として、新しい学問を開拓・展開され、数多くの研究成果を残されると共に、多くの後進の育成にも貢献されました。先生の残された指針をもとに、これからの研究と教育に精進することをお誓いすると共に、先生のご冥福をお祈り申し上げます。 日本第四紀学会会長 米倉伸之

第17期・第4回第四紀研究 連絡委員会 議事録(案)

日時：1998年9月4日(金) 13:30 ~ 17:00

会場：日本学術会議第4部会議室

出席：太田陽子・鎮西清高・大場忠道・小野昭
小野有五・酒井潤一・小泉格・町田 洋
欠席：小池裕子・吉川周作・坂上寛一・
砂村継夫・増田富士雄

1. 報告

(1) 日本学術会議(第4部会 夏部会7月2日
開催)

鎮西氏よりつぎの報告があった(資料配布).
連合部会

- 1) 国立研究機関の見直し法人化の方向が理学
になじむか.
- 2) 地域研究研連を発足する方向.
- 3) 第4部関連研連付置の小委員会申請: 地球物
理データ問題, 地磁気観測, 陸上掘削など.
- 4) 科研費時限付き分科細目の推薦: 1位生物
多様性; 2位インターネット学習
- 5) 研連見直し問題: 日程を決め検討に入る.
- 6) 第18期学術会議の会員選出に向け手続き,
規定を検討・整備中

(2) その他関連会議

1- 地質科学総合研連(第3回; 6月11日)

鎮西氏よりつぎの報告があった.

- 1) 大学における地質科学とくに基礎教育を検
討するシンポジウム開催の提案があった. カ
リキュラム, 特定分野の研究, 地質調査業界
から大学への提言などを含む.
- 2) 地連協(学会連合)の目的とくに社会と地
質科学連帯の意義を巡って議論
- 3) 高レベル放射性廃棄物の基礎研究の協力要
請: 今期の学術会議の計画の下で, 見直しす
ることになった.
- 2- 第6回古海洋学会がリスボンで開催された
ことが大場氏より報告された. 日本からの参
加者は40人. 次回は日本(札幌)で2001年
に開催.

(3) INQUA大会へ向けての第四紀研究特集号
recent trend が次のように決まった.

編集委員(太田(委員長), 坂上, 吉川, 松
浦, 町田, 米倉) 執筆者(層序: 増田, テフ
ラ: 町田, 海岸: 大村, 考古・人類: 小野(昭)
ほか, 土壌: 坂上ほか, 地殻変動: 太田ほか,

PAGES: 小野(有)ほか, 古海洋: 多田, 古
生態: 小泉, 湖沼堆積物: 福沢, 古地磁気:
兵頭, 総括: 米倉)

60ページ, 原稿締め切り1999.1.28, 発行
1999.6

(4) シンポジウム開催予定

議題の項で記す.

(5) 第四紀の教育に関するアンケートのとりま
とめ

立石, 野上, 大場, 小池, (米倉)の各氏が担
当. 大学での講義科目のシラバス作成.

2. 議題

(1) 学術会議総会への提案 とくになし.

(2) INQUA 役員選挙 次回の議題とする.

(3) INQUA 名誉会員の推薦 次回の議題とする.

(4) シンポジウム開催予定

98/11/5 「急激な気候変動・モンスーン変
動・ダスト変動の謎をとく」 担当小野
(有)・大場氏

99/6/25 「火山灰土壌による環境復元」担当
坂上氏

その他

- ・地質科学総合研連提案の「大学における地質
科学の教育」(仮称)に第四紀研連として, 上
記1.(5)のアンケートをとりまとめて話題
を提供する.
- ・第四紀研究の展望(仮称)のシンポジウム,
上記 recent trend 特集号を基礎にする(構
想担当: 町田・小池)
- ・日本の古人類と環境変化(仮称)(構想担当:
小野昭)
- ・古地震国際シンポジウム(仮称)(構想担当:
太田・奥村)

(5) INQUA 分担金 請求額 12500SF

(6) INQUA 大会日本招致

2007年をめざす. 検討委員会設置を第四紀
学会幹事会に申し入れることになった.

(7) 次回の日程 11月30日(月)

以上 記録: 町田 洋

會員消息

1998年8・9・10月分(受付順)

新入會員

金井憲一 (所属) 相模原市立博物館学芸班
 三輪敦志 (所属) 応用地質(株) 中部支社技術一部地質技術課
 中尾俊二 (所属) 朝日地質コンサルタント
 桑山 龍 (所属) 名古屋大学大学院理学研究科地球惑星理学専攻生物圏進化学講座
 片岡裕子 (所属) 岡山理科大学大学院理学研究科総合理学専攻
 嶋田智恵子 (所属) 北海道大学大学院地球環境科学研究科
 島口 天 (所属) 青森県立郷土館学芸課
 青山尚友 (所属) 宮崎県埋蔵文化財センター
 井上智博 (所属) (財) 大阪府埋蔵文化財調査研究センター南部調査事務所古市分室
 中山弘樹 (所属) 日野市教育委員会生涯学習部生涯学習課
 小田切聡子 (所属) 建設省国土地理院地理地殻活動研究センター地殻変動研究室
 橋詰 潤 (所属) 早稲田大学第二文学部歴史・民俗系専修
 砂川奈都召 (所属) 東北大学大学院理学研究科地学専攻
 富永好明 (所属) 高知大学理学部地学科
 谷 篤史 (所属) 大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻
 吉田大一郎 (所属) 大阪大学大学院理学研究科
 井上耕一 (所属) 大阪大学大学院理学研究科池谷研究室
 高地セリア好美 (所属) 岩手大学農学部農林生産学科
 方 晶 (所属) 名古屋大学大学院文学研究科地理学教室
 香川 淳 (所属) 千葉県地質環境研究室
 土屋好幸 (所属) 日本総合建設(株)技術部
 奥田昌明 (所属) 千葉県立中央博物館環境科学研究科
 薩摩林忠美 (所属) 下諏訪町立下諏訪中学校
 柘植 孝 (所属) 川崎地質(株)環境防災事業部
 原 晴彦 (所属) 川崎地質(株)環境防災事業部

所属・住所変更

赤木三郎 (所属) 放送大学鳥取学習センター
 麻生 優 (所属) 愛知学院大学文学部
 大木公彦 (所属) 鹿児島大学理学部地球環境科学教室
 北川芳男 (所属) 札幌国際大学短期大学部
 北澤和男 (所属) 岡谷市教育委員会
 木下邦太郎 (所属) 町田市立町田第五小学校
 小西健二 (所属) 金沢大学名誉教授

香原志勢 (所属) 帝塚山学院大学人間文化学部人間学科
 塩原鉄郎 (所属) 青森大学工学部
 渋谷 紘 (所属) 埼玉県立所沢北高等学校
 中島和彦 (所属) 応用地質(株) GIS事業部
 榆井 久 (所属) 茨城大学広域水圏環境科学教育研究センター
 林 隆夫 (所属) 大阪府立茨田高等学校
 初倉克幹 (所属) 基礎地盤コンサルタンツ(株) 環境部
 米地文夫 (所属) 岩手県立大学総合政策学部環境政策講座
 横川 巖 (所属) 日本海外コンサルタンツ(株) 技術課
 野上丈助 (所属) (有) インマヌエル野上
 金澤直人 (所属) 中央開発(株) 企画部企画情報室
 原 聖樹 (所属) 神奈川県農業総合研究所農業環境部
 佐藤一雄 (所属) 新潟県立新津江南高等学校
 松本俊幸 (所属) 国際航業(株) 東日本事業部地質部地番CG
 渡邊真紀子 (所属) 東京工業大学大学院総合理工学研究科環境理工学創造専攻
 小海 洋 (所属) (財) 日本気象協会関西本部合庁分室総務部
 安野 信 (所属) 神奈川県立保土ヶ谷養護学校
 竹本弘幸 (所属) 茨城大学大学院理工学研究科
 水野清秀 (所属) 地質調査所大阪地域地質センター
 垣見新一郎 (所属) 静岡県立島田商業高等学校
 鈴木 威 (所属) (財) 杉本美術館
 平塚伸生 (所属) 九州電技開発(株) 環境地質部
 國枝孝之 (所属) (株) リコーソフトウェア研究所
 久保定夫 (所属) (株) シマダ技術コンサルタント調査部
 柏木修一 (所属) 自治省消防庁
 並松 猛 (所属) 半田市役所建設部土木課
 大井信夫 (所属) ONP 研究所
 寺谷直美 (所属) 倉吉市立久米中学校
 伊藤昭雄 (所属) 青森県立木造高等学校車力分校
 御堂島 正 (所属) 神奈川県教育庁生涯学習部文化財保護課
 板東和郎 (所属) (株) 興和水工部
 伏島祐一郎 (所属) 通商産業省工業技術院地質調査所地震地質部活断層研究室
 落合文登 (所属) 復建調査設計(株) 高知事務所技術課
 山川史子 (所属) 石川県立野々市明倫高等学校
 井上陽一 (所属) 京都府立西舞鶴高等学校
 濱田明利 (所属) 兵庫県立姫路別所高等学校
 曾我智彦 (所属) 国際航業(株) 東日本事業本部地質部地質グループ
 鈴木 宏 (所属) 神奈川県平塚土木事務所計画建築部許認可指導課

会員消息

苅谷愛彦 (所属) 通商産業省工業技術院地質調査所
地震地質部活断層研究室
川崎 敏 (所属) (株) 三祐コンサルタンツ技術部
町田瑞男 (所属) 埼玉県立埋蔵文化財センター教育
局
石井隆司 (所属) 菖蒲町立菖蒲小学校
西連地信男 (所属) 那珂町立五台小学校
田中好國 (所属) 兵庫県立播磨養護学校
中村由克 (所属) 野尻湖ナウマンゾウ博物館
有田耕一 (所属) 国土建設学院建設学部
多田 堯 (所属) 建設省国土地理院地理地殻活動研
究センター
内山 高 (所属) 大阪市立大学理学部地球学教室人
類紀自然学研究室
井上公夫 (所属) 日本工営(株)コンサルタント事業部
田中眞吾 (所属) 岐阜聖徳学園大学教育学部
邑本順亮 (所属) 石川工業高等専門学校一般教育科
辻 光 (所属) 中央開発(株)東京支社
桧垣大助 (所属) 弘前大学農学生命科学部
近藤洋一 (所属) 野尻湖ナウマンゾウ博物館
品川道夫 (所属) 潟西中学校
前田俊一 (所属) (株)応用地理研究所地理調査部
藤原 治 (所属) 核燃料サイクル開発機構東濃地科
学センター 〒509-5102 土岐市泉町定林寺
959-31 Tel. 0572-53-0211
高木俊男 (所属) 核燃料サイクル開発機構東濃地科
学センター

退会会員

古屋義二郎
井上克弘 逝去退会(逝去日 98.8.16)
渡辺 誠
小野晃司 逝去退会(逝去日 98.4.22)
堀川恵司
白取克之
(株) エーティック環境文化研究所研究開発部

第四紀通信に原稿をお寄せ下さい

広島大学文学部地理学教室 奥村晃史 〒739-8522 東広島市鏡山1-2-3
kojiok@ipc.hiroshima-u.ac.jp
Phone: 0824-246657 Fax: 0824-240320

発行スケジュールが変わります!!

次号は1月上旬原稿締切 - 2月上旬発行予定です。
インターネットにアクセスできる方は第四紀学会ホームページ
<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/qr/>で最新情報をチェックして下さい。